(社)北方圏センター
公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センターに名称を変更

8月1日、北方圏センターは、公益社団法人に移行し、名称を「公益社団法人　北海道国際交流・協力総合センター」略称「HIECC(ハイエック)」に改め、新たなスタートを切りました。

HIECC(ハイエック)としての新たな出発を機に、当センターは、北海道における国際活動の総合的、中核的な拠点としての役割をこれまで以上に果たして行けるよう努めてまいります。

ホームページ、メールアドレス(HIECC代表)は次のように変わります。

http://www.hiecc.or.jp／(メール代表)hiecc@hiecc.or.jp

注)当面の間、メールアドレスは旧アドレスと併用いたします。

公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター　平成23年度通常総会を開催

公益社団法人としての最初の総会を開催し、移行前日までの決算を審議していただきます。会員の皆様には別途ご案内の通り、ご出席くださいますようお願いいたします。

日時 平成23年9月29日(木)
通常総会　16:00～／祝賀会　17:15～

場所 京王プラザホテル札幌　3階　「雅の間」
(札幌市中央区北5西7)

LIBRARY INFORMATION JICA札幌図書室

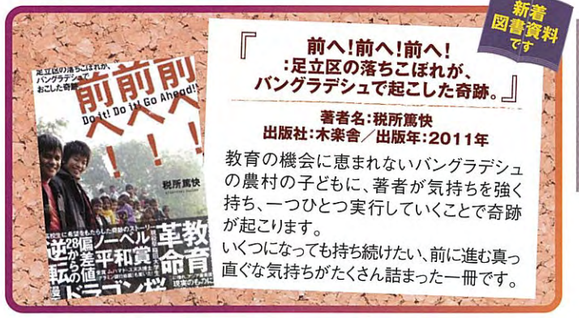
JICA札幌図書室

国際協力、開発途上国に関する図書を中心に、約9,800点の資料を所蔵しております。どなたでも自由に閲覧できますので、どうぞお気軽にご利用ください。

北海道における国際協力に関する情報の提供を目的とし、1996年、JICA札幌に図書室が開設されました。

「JICAについて知りたい」、「開発途上国について知りたい」、「国際協力について調べたい」という皆様に応えられるよう、たくさんの図書、ビデオを取り揃えております。

また、図書室内で当室所蔵のビデオ、DVDの視聴が可能です。所蔵図書に関するご質問など、どうぞお気軽にお問い合わせください。



JICAの事業紹介ビデオ、教育分野の図書など、一部の資料の貸出を行っております。

貸出対象者： 18歳以上の方
(運転免許証等の身分証明書を必ずご持参ください)

貸出期間、冊数： 1週間、2点まで

なお、貸出対象ビデオ、教育分野図書、毎月の新着図書資料の一覧表をJICA札幌ホームページにて公開しております。

〒003-0026　札幌市白石区本通16丁目南4番25号
TEL：011-866-8306　FAX：011-866-8302
E-mail：jicasic-lib@jica.go.jp
OPEN：月～金 9:30～19:00　土 9:30～16:30
CLOSE：日曜、祝日、年末年始

夏の一夜公共施設や文化施設、民間施設を夜間開放して、市民にそれぞれの施設の専門分野や特色あるプログラムを楽しんでもらおうという文化イベント「カルチャーナイト」が今年も開催され、HIECCも「世界の遊びを体験しよう!」、「インターナショナルカフェ(外国人とお話ししてみよう!」、「世界の民族衣装を着てみよう!」をテーマに実施した。

7月15日(金)の午後5時半スタート。続々訪れる親子連れなどがHIECCの施設各所で用意されたプログラムを楽しんだ。協力してくれた外国人は、東欧、アジア各国、中南米、大洋州出身のJICA研修員が15名、東海大学で学ぶスウェーデンの留学生7名ほか、アメリカ、中国、オーストラリアの留学生が市民との交流に参加してくれた。また、プログラムの一部は東海大学の学生10名が司会、進行を担当した。市内豊平区に住む小学生、春希君は「来年もまた来たい」と名前と住所を書き残していった。また、来年も会いたいね。

(主催:カルチャーナイト実行委員会　運営:NPO法人カルチャーナイト北海道)

お願い

「であい」は北海道発の国際協力情報紙として、毎号、北海道内の国際協力に関する各地の取組みや話題を掲載します。市町村、団体、小中学校、大学などで開催される行事、イベントなどの情報をお寄せ下さい。　(調査研究部 pbl@hiecc.or.jp　または国際協力部　intc@hiecc.or.jpまで)

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
(旧 社団法人北方圏センター)

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2011年9月5日
TEL.011(221)7840　FAX.011(221)7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：pbl@hiecc.or.jp(調査研究部)　intc@hiecc.or.jp(国際協力部)
印　刷：岩橋印刷株式会社

北海道の国際協力情報紙
であい
vol.62 2011 AUTUMN
公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
(旧 社団法人北方圏センター)
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

HIECCの多文化共生事業のこれまでと今後の展望

多文化共生社会をめざして

昨今、グローバル化が益々進展し、私たちの住んでいる地域に外国人観光客が滞在したり、外国人の方達が生活していることがまったく珍しくない状況にあり、北海道においても「多文化共生」を積極的に推進することが必要な状況になってきている。

データで見ると、北海道における外国人登録者数は平成22年12月末現在22,224名で、それに対し北海道の人口は5,518,088名となっており、全人口に対する外国人の比率は、0.4%と他府県の状況と比較すると非常に低いが、地域によってはなんと10%を超えるところもある。

一方、外国からの来道観光客は、平成21年度実人数で675,350名となっており、10年前の平成11年度実人数203,900名と比べて10年で3倍以上に増えている。

このような状況から、これまで北海道国際交流・協力総合センター(旧北方圏センター)として取組んできた、または現在取組んでいる多文化共生事業についてご紹介するとともに、今後の展望について考えてみたいと思う。

多文化共生センター大阪代表理事　田村太郎氏の講演

①「多言語対応救急救命表示板」及び「処置カード」の作成

本紙でも以前紹介したが、平成20年度及び21年度にこれらの事業を行った。表示板は、日本語が不自由な外国人が急病になったり怪我を負ったりして救急車を呼んだ際に、言葉の壁が原因となって救急救命士による応急処置が遅れることが無くなることを目的に作成したものである。翌年度には、更なる事業として、急病や怪我の症状を判定した次の段階として、「処置」の確認を行うために「処置カード」を作成し、道内67消防本部すべてへ配付した。<当センターのホームページ(北海道国際情報ネットワーク)から無料でダウンロードできます。http://www.hiecc.or.jp>

救急救命表示板シミュレーション　北海道消防学校において

② 多言語対応救急救命表示板等シミュレーション研修

上記表示板及びカードを実践的に活用してもらうことを目的に数年前から北海道消防学校と連携し、全道の各消防本部より同校に研修に来る研修生と在住外国人による救急救命表示板のシミュレーション研修を行っている。普段なかなか接することのない外国人に対し、実際の現場で救急処置をする際に戸惑いが生じないよう同校の研修の中で訓練するものである。

③ 道内各地で「多文化共生」をテーマにした国際理解講演会

「多文化共生」という概念の啓発を目的に国際理解講演会を開催した。この講演会では、多文化共生センター大阪の代表理事田村太郎氏を講師として迎え、今後は地域にとって「多文化共生」が地域活性化に必要不可欠であるというお話をしていただいた。要点は、日本では人口減少が始まっており、減少スピードが先進国で群を抜いている状況にある。人口が減るということは自動的に労働人口が減るということで、真っ先にそのシワ寄せが各地域に来ることになる。そのような観点から、外国人が住みやすい地域づくりを進めることが結果として、将来的に労働力も確保でき地域の活性に繋がるということだ。

④ 多文化共生ワークショップ

(公財)札幌国際プラザと連携し、多文化共生ワークショップも行っている。自治体、国際交流協会、交流等の活動団体やNGOなど様々な担い手が連携し、北海道の多文化共生を推進していこうというもの。昨年度は、3回ワークショップを行い様々な意見交換などを行うことにより、互いに顔の見える関係ができ、更には何か協働してみようという機運が出てきた。今年度は、先ずは情報交換からということでメーリングリストを立ち上げ、今後の活動を模索する。

今後の展望

北海道全体で外国人を災害等の弱者にしないための情報発信等について各関係機関と連携のうえ、活動を行っていくこととしたい。3月の東日本大震災では、外国人の方も多数亡くなっている。外国からの観光客が安心してまた北海道に来てもらえるよう、災害多言語サポーターを登録のうえ、道内各地で研修会を行い、有事の際に活躍してもらう制度づくりも他府県の状況を参考にしつつ整えていく予定。結果として、外国人観光客のリピーターや外国人の長期滞在者が増え、北海道全体が活性化されるようにこのような実施を計画している。

(交流部)

私の国際協力活動日記

JICA青年海外協力隊OBから

第3回

大澤　洋平 さん
理数科教師

私は、平成20年度4次隊でアフリカのナミビアという国で理数科教師として活動をしました。独立からまだ21年と歴史が浅い国での2年間の活動で、私は貴重な経験をたくさん積むことが出来たと同時に人間として成長することが出来たと感じています。

配属先は小中高一貫の学校で、中学2・3年生の数学の授業が私の主な活動でした。配属先からは「生徒の数学の試験成績を向上させること」を第一に求められ、最初は「言葉の壁」や「日本とは全く違う環境」で思うように授業を進める事が出来ず期待に応えられるかどうか不安に感じて悩んだり、苦労をしました。そんな中、考え方を変えて「現地の人々の生活や習慣に自分のスタイルを少しずつ組み合わせていく」よう心掛けてみました。また「物事を常にポジティブに考えること」や「笑顔を絶やさないこと」も心掛けるなど自分自身に変化をつけてみました。その上で「失敗を恐れずチャレンジしてみる」ようにし、それによって良い結果を生み出せたこともあり「考え方と姿勢は良い結果に繋がる」ことを実感することが出来ました。

活動は他にもパソコン・体育・美術の授業やサッカー部の指導など、「理数科」という枠に捕らわれず「相手のニーズに合わせた活動」を行えたと感じています。授業だけではなく「日本文化」を紹介したり「折鶴の折り方」を教えたりなど、なかなか日本について知る機会が少ない生徒達に異文化交流の時間も作れたと思います。

協力隊での活動や配属先の生徒達の姿を見て、これからは場所を問わず「次世代を担う子ども達の育成」に携わっていきたいと思います。

青年海外協力隊　平成20年度4次隊派遣
派遣国:ナミビア共和国
職　種:理数科教師

オホーツク国際ふれあい広場2011

（日時:平成23年7月9日10:00～14:00　　会場：北網圏北見文化センター）

オホーツク国際ふれあい広場（以下「ふれあい広場」）は、オホーツクエリア在住の外国人と地域住民との国際交流イベントとして、毎年開催されている。主催は、産学官が連携して草の根技術協力を進める「北見国際技術協力推進会議」と、青年の海外派遣事業を行う「北見市青少年国際交流事業実施委員会」で、どちらも北見市の国際貢献・交流を推進する団体であり、行政的には、推進会議を市民環境部市民活動推進室が、実施委員会を社会教育部青少年課がそれぞれ所管し事務局を担当している。

さて、ふれあい広場では、歌やダンスなどのステージイベントや茶道、餅つき、そば打ちなどの体験コーナー、また、国際交流団体によるフェアトレード（商品の販売）や、留学生・ボランティアによる縁日コーナー、さらにはJICAのパネル展示と青年海外協力隊OBによる相談コーナーなど、バラエティに富んだプログラムで、家族連れはもちろん、外国人を含む400人超の来場者に楽しんでいただいた。

特に、茶道や餅つき、そば打ちには長い行列ができ、催事ではやはり体験モノが強いことを実感する一方、ステージ上でも、緊張感いっぱいの居合や空手ちびっ子らの板割をはじめ、市内の保育園児による「よさこい」や外国人留学生による民族舞踊、楽器の演奏などに注目が集まっていた。

ふれあい広場は、外国人にとっては、日本の文化や習慣をより深く理解してもらう機会であると同時に、特に地域住民との良き出会いの場となるよう、そして、住民にとっては、身の回りにこんなにも多様な民族が暮らしていることの気づきとともに、異文化に直接触れることの驚きや喜び、豊かさを実感してもらえる好機であってほしいと思う。

民族や宗教、言語、文化、習慣、イデオロギーなどの違いを知り、認め合い、そして繋がり合うのが国際交流。そして、それは身近な家族やご近所、地域など日本人同士にとっても大切なことに間違いはない。かくして、地球規模にその理念が共有され、実現された暁には、その向こう側に世界の恒久平和が待っている…を努々（ゆめゆめ）疑ってはならないと思う今日この頃であり、その種になりたいふれあい広場なのであります。

北見市役所市民環境部市民活動推進室（国際交流担当）主幹
塩浜浩二

地域との交流

札幌国際センター・帯広国際センターの行事から

「サッカースポーツ少年団と交流」（札幌）

6月28日（火）午後6時半から、佐々木コーチらに引率され北郷瑞穂サッカースポーツ少年団のメンバー20名が札幌国際センターを訪れ、JICA研修員や当日のゲストたちとの交流を楽しんだ。

第1部の交流会では、ブラジルの長期研修員で、内田エレン美和さんほかによる本場ブラジルサッカーのプレゼンテーションや南東欧地域のアルバニアほか5カ国の研修員によるバルカンダンスの実演、また、ラジオ・パーソナリティーとしても知られている武田英祐一氏の歌などが披露された。

続く第2部は、この日のゲストで水晶玉を使ったパフォーマンスで知られる児玉と弥勒、ハイパーヨーヨーのKENTA、和太鼓の札幌本陣太鼓とよさこい南中魂道極め組が次々と見事な技や和のパフォーマンスで交流会を盛り上げた。

終了後は、参加者全員で後片付けをして楽しい夏の一夜を締めくくった。

「『世界のともだち2011』開催」（帯広）

7月3日（日）午前10時30分から午後3時まで、「世界のともだち2011」が帯広国際センターと森の交流館・十勝で開催された。

当日は天候にも恵まれ、研修員、留学生、在住外国人のほか、たくさんの一般市民が訪れ、多くのボランティアの協力のもと、2,500人もの人たちが夏の恒例行事を楽しんだ。ステージでのゲームやパフォーマンス、子供たちが外国の人たちと交流するコーナー、スタンプラリー、民芸品等を展示するNGOブースなど、多彩なイベントを通して市民が外国の人たちとの交流を楽しんでいた。

また、世界13の国と地域の人たちが出店し、料理などを提供した「ザ・屋台」では、売切れ店が続出するなど、大変賑わっていた。

（世界のともだち実行委員会主催）

さっぽろ留学生日記

長春（吉林省）～西安（陝西省）～北海道

馬　沢洲さん
（西安交通大学日本語学科3年
北海道大学交換留学生）

大連からの直行便で新千歳空港へ

西安交通大学と北海道大学との交換留学で2010年10月に来道して日本語を勉強している。出身は東北部３省のひとつ、吉林省の長春だが、大学入学に際しては一番遠い所に行こうと中国西部の西安にある大学を選んだ。在学中、北海道大学に留学できることがわかって応募した。「私の生まれ故郷は北海道に近いですから、必ずすぐ慣れると思いました」大勢の希望者の中から選ばれ、西安交通大学から北海道大学への初の留学生に決まった。

「四季がはっきりしていて、冬は雪が多くて寒いです。長春市は北海道と似ています」という。

「地理的に近いけれど違うところも多いです」

HIECCがこの10年積丹町と続けてきた小中学生と留学生・研修生との交流で昨年11月の10周年記念の訪問に参加した。訪れたのは美国小学校。「子ども達と遊んだり、美味しいものを食べたりと楽しかったです。それと喜茂別町に行った時に体験したソバ打ちも面白かったです」と、日々日本体験を重ねてきた。

積丹町で小学生と交流

「北海道は空気が新鮮で澄んでいて素晴らしいと感じています」。今は日本語も上手になって札幌での生活に不便はないという。それでも、最初に札幌での生活を始めた頃は、「北海道に来る前には日本語の文法や読み書きはたくさん習いましたが、会話はあまり上手ではありませんでした」と、話すのが一番難しかったそうだ。

喜茂別町でソバ打ちを体験

同じアジアの国で、地理的にも近いが違いも体験した。ひとつ例をあげると、日本の大学では学生が部活に力を入れる姿が珍しかった。「仲間がたくさんできてうらやましいです」。中国では余裕があれば部活のようなこともしますが日本に比べると少ないという。

まもなく帰国、西安交通大学4年生に

勉強のかたわら、「積丹町交流」、「喜茂別町交流」、「北海道消防学校での救急救命表示板のシミュレーション研修」、「カルチャーナイト」など当センター主催の交流事業にも積極的に参加し、各地の市民や子どもたちと交流してきた。

日本への第一歩は新千歳空港だったが、勉強の合間の休みには東京や大阪にも足を運んで見聞を広めてきた。3月11日の東日本大震災の前日は一時帰国のため東京にいた。あと一歩で大地震に遭遇していたと緊張の面持ちで語っていた。旅行から北海道に戻ってきて「北海道はいいな」と思ったそう。

まもなく8月15日に帰国し、4年生として西安交通大学に戻る予定。将来は経済学を学びたいという希望を抱いている。